

久保田滋・樋口直人・矢部拓也・  
高木竜輔編著

## 『再帰的近代の政治社会学』

——吉野川可動堰問題と民主主義の実験——

評者：船橋 晴俊

本書は、吉野川可動堰の建設の可否をめぐる、徳島市を中心に組織化された住民運動を中心的対象として、地域政治の過程を政治社会学的に検討した労作である。本書の特徴ならびに貢献はどのようなものであろうか。

第1に、本書は今日の社会における民主主義の可能性の探究を基底的な問題意識とし、対象の選択において、全国的にもたいへん注目される吉野川可動堰をめぐる住民投票とその後の政治過程を取り上げ丹念な実証的研究を行うとともに、この地域の政治過程とそこに見いだされる変化を、再帰的近代化論、亀裂の再編成、緑赤連合論、などの理論的視点を動員して検討しようとしている。このような問題意識と対象選択は、的確かつ非常に意欲的なものである。

第2に、本書は、長期に渡る系統的で周到的な現地調査に立脚している。調査の方法においては、さまざまな立場の当事者に包括的なヒアリングを行うとともに、地域の政治過程のカナメになる知事選挙や市長選挙にあわせて、波状的にサーベイ調査を積み重ねており、地域の政治過程の解明として、非常にオーソドックスで堅実な情報収集を精力的に遂行している。

第3に、本書は、7人の共著であるが、一つの研究集団としての統合度が高く、各章の問題

設定と論述が一貫しており、各章間の論理的つながりも明解である。選挙過程を分析する各章内において、ヒアリングデータとサーベイデータの分析の方法は同型的でわかりやすい。仮説を提示し、そのつど、データによって検証していくという分析の手法は、説得的である。そして、精力的に収集されたヒアリングとサーベイ調査のデータが研究成果のとりまとめにおいて、たくみに結合されている。

第4に、本書各章は、各時期ごとの動向を臨場感あふれる筆致で、明快に描き出している。すなわち、住民運動を取り巻く状況と、その取り組む課題が段階を追って変化するにつれて、住民運動そのものの性格変容も進行していくというダイナミズムが描かれている。その現実把握は、現象の単なる記述にとどまらず、政治社会学的用語を豊富に駆使することにより、そのつどの現実の再構成と意味発見がなされている。例えば、「フレーム」概念の駆使によりそれぞれの選挙の争点形成のあり方を分析している点や、改革派知事の出現根拠の考察は、秀逸である。

このような意味で、本書は、地域政治過程の政治社会学的研究の領域において、実証的・理論的な共同研究の方法と成果のとりまとめについて、一つの良いモデルとなりうるような特質をそなえている。若手研究者グループの真摯な探究の結実として、本書の学問的意義を高く評価したい。ただし、本書を支えた豊かな研究内容をより説得的に提示するためには、さらに、次のような論点についての工夫や考察の深化があってもよいように思われる。

第1に、本書の対象にかかわる基本データの提示については、読者にとって、より理解しやすい工夫があってもよかつたのではないだろうか。例えば、可動堰周辺の地図、各種の選挙の得票数、サーベイ調査の質問紙、略年表などを、

より一覧性のある形で、提示しても良いのではないか。例えば、徳島市長選挙のデータの提示などは必須であろう。筆者グループとしては、他の機会にすでにそれらの情報を提示したり、すでに写真や数多くの図表を本書の中に盛り込むことによって、理解を助ける努力を十分に果たしたという意識を持ったのかもしれないが、これらのデータがもっとまとまったかたちで提示されれば、読者の理解を助け、本書の魅力を一段と高めることになったであろう。

第2に、吉野川可動堰問題をめぐる論争について内在的な基本情報の提供が不足している。ここで、内在的な基本情報とは、吉野川可動堰の工事内容や建設経費とその負担者など吉野川可動堰そのものの特質の説明についての情報である。とくに、可動堰の是非を論ずる推進派と反対派の主張の内容については、より掘り下げて体系的に紹介することが不可欠であると思われる。反対派の反対理由は、住民運動の盛り上がりなどの基本的理由の考察にかかわる。本書では、第3章において、ベンヤミンに示唆を受けつつ「想起にもとづく連帯」概念を使用して、反対運動を支えた論理と心理を説明しようとしている。これによって、そこから反対運動の反対の理由が推測されるが、それは間接的な推定にとどまるものであり、反対運動そのものの理解としては、隔靴搔痒の感じが生じてしまう。

広汎な共鳴を呼び起こした理由が、環境破壊への危機感だったのか、歴史的文化的遺産にかかわるアイデンティティの防衛意識だったのか、浪費的な公共投資に対する財政上の危惧や負担拒絶だったのか。反対運動の参加者に、これらは、多様なまた複合的な形で共有されていたはずであるが、それはどのような意見分布だったのか。このような視点は、以後の地域政治過程の理解にも重要な視点であると思われるが、残念ながら本書では、この点での説明が不

足している。さまざまな論争的な論点について、推進派の主張と反対派の主張とを対比し、反対派の説得力がどういふものであったかを内在的に紹介すべきである。

第3に、本書を支える理論的視点の適否という問題がある。本書は、理論的視点の定位において、ロッキンらの「亀裂」論と、ベックらの再帰的近代化論に大きく依拠している。だが、これらの理論的基礎概念と本書の対象とした事例は、うまくかみ合っているのだろうか。海外諸国の研究で生み出された理論諸概念が、やや機械的に適用されている感があり、この事例に即した独自の理論形成という志向性が不足しているのではないかという疑問を持つ。

「再帰的近代化」の概念は本書のタイトルにも採用されていることから、筆者グループが重視しているものと考えられるが、この概念が本書の対象事例に即して、どのような意味が必要であるのか、あるいは、必然的なものなのだろうか。タイトルに表示された「再帰的近代」という言葉と本書の内容がどのようにつながっているのかが、評者には必ずしも明確に把握できなかった。言い換えると「再帰的近代」という概念をタイトルに採用するほどに重視するのであれば、その意味内容のより豊富な提示と、この鍵概念の要所における駆使が、もっとあってもよい。本書のボディをなす数次にわたる選挙の分析（第2章から第8章）は、再帰的近代（化）という言葉を使わずになされている。視点を変えれば、再帰的近代（化）という鍵概念を鍛え上げていくという視点に立った場合、本書の研究を通して、再帰的近代（化）という概念の内容やその周辺において、どういふ論点が発見されたのだろうか、この概念の展開力がどのように豊富化したのだろうか。

また、本書では、先行研究における「亀裂」概念を有力なものとして評価し、「物質主義」と

「脱物質主義」との間の価値亀裂や、本書の言う意味での「院内」と「院外」との亀裂を、説明上の注目論点としている。これらの論点については、たしかに本書のように説明することもできよう。だが、本書の言う意味での「院内」と「院外」の亀裂は、21世紀になって始まったことではなくて、戦後の日本の地方自治の歴史において、何回も繰り返されてきたことではないのだろうか。ある争点に取り組む住民運動が、当初の地方議会の多数派の意向に逆らい、ついには、議会をして翻意させるといった過程は、例えば、1964年に静岡県沼津・三島・清水のコンビナート反対運動にも見られたことである。「院内」と「院外」の亀裂は、21世紀になって出現した新しい特色と言えるのだろうか。

第4に、本書の基底的問題関心は民主主義の実現の探究であり、この点に評者は共鳴を覚えるものであるが、この問題関心を前提にするのであれば、住民運動の成功や失敗についての教訓を、運動論の文脈でもっとくみ取る努力をするべきであろう。どのようにしたら住民運動は成功できるのかという実践的教訓は、住民運動の当事者から社会学（者）に寄せられる中心的な期待である。徳島の住民運動は、住民投票の実現という点で、貴重な成功を獲得したのであるから、その過程からはさまざまな教訓がくみ取れるはずである。本書では、プラカードを使っている自己主張の積極的意義が語られているが、もう一步掘り下げて、住民運動内部と外部に立ち現れてくるさまざまな困難をどのように克服したのかという点での分析考察がほしい。これだけの大人数を動員する運動には優れたリーダーシップ的・確かな組織運営原則が存在していたはずである。あるいは運動の成否を分ける岐路において、的確な判断が積み重ねられてきたはずである。その点での教訓のくみ取りは出来ないであろうか。またさらに、教訓のくみ取

りは、「失敗」からも可能であろう。非常に強力で勝利を獲得した住民運動が、その後の首長選挙で敗北するという事例は、しばしば見られる。例えば、沼津の住民運動は1964年のコンビナート建設阻止の勝利の後、1965年の市長選においては、内部で分裂し、コンビナート建設を推進しようとしてきた前市長の四選を許し敗北している。このような事例は繰り返されているのであって、そこから、教訓をくみ取ることも意義深い課題であるはずである。

第5に、本書のストーリーは一貫しているが、それだけに同じ対象を取り扱いつつ、もっと異なる視点からの意味発見をするという可能性を脇においているように思われる。緑赤連合についての考察は、論点と意味発見の豊富化への志向という点で貴重なものであるが、現代日本社会の無党派層の増大とその動向を把握するためには、さらにいろいろな視点や仮説や概念の提示があってもよいのではないだろうか。日本における緑赤連合についての考察としては、「赤」の分析がさらに必要であるように思われる。日本においては、本書で「赤」と言う言葉によって表される諸組織が、どれだけ思想的な内実を持っていたのかが問われなければならないだろう。

以上のような疑問を評者は抱かざるを得ないが、それは、本書によってさまざまな教示と知的刺激を受けた評者が、それに触発されて思い浮かんだという性格を持つものである。筆者グループは本書以後にも精力的に研究活動を続けているので、近い将来さらに豊かな結実が見られるであろう。その過程で、筆者からの疑問にも答えてくれるであろうことを大いに期待している。（久保田滋/樋口直人/矢部拓也/高木竜輔編著『再帰的近代の政治社会学—吉野川可動堰問題と民主主義の実験』ミネルヴァ書房、2008年3月、viii+333頁、定価4,000円+税）

（ふなばし・はるとし 法政大学社会学部教授）